



収蔵品紹介 千曲川流域の漁具



ウケ (筥)

長野市は、千曲川の中流域にあたります。市内では千曲川と犀川が合流しています。そして、裾花川、浅川、鳥居川といった支流が流れ込んでいます。これらの川や、それに連なる用水、水田では、漁撈（魚などを捕ること）が行われてきました。

現在の長野市にあたる地域での漁は、専門の漁業者によって行われてきたわけではありません。農業などをしながら漁をしていた人が大半で、余暇としても行われていました。

長野市立博物館には、そうした漁撈で使われた道具が収蔵されています。収蔵品の多くは20～30年ほど前に収集されたものですが、博物館では一昨年きょねんの水害をきっかけに、漁撈関係の収蔵品を見直してみました。ここでは、そのうちの一部をご紹介します。

資料群の概要 一分類

千曲川流域で使われてきた漁具は、その機能や用法から大きく4つに分類することができます。①ウケ、②アミ、③ヤス、④ツリの4種類です。

①ウケ (筥)



写真1 ハコブセ



写真2 ツツ

最も多いのが、ウケ (筥) に分類されるものです。中流域では、上流よりも流れが緩やかになり、魚の種類が多いため、ウケの種類も多いのです。環境や狙う魚によって形態の異なるウケがみられます。

ウケは、魚を誘い入れる道具です。円錐型、あるいは箱型のものに餌を入れ、水底に沈め、魚を誘い込みます。円錐型のもの(表紙口絵)はウケと呼ばれることが多く、箱型のもの(写真1)はハコブセと呼ばれました。ウケには様々な形があり、地域名としてツツとも呼ばれました(写真2)。

サイズは大小様々です。捕る魚によって大きさや目の粗さが違いました。

ウケは現在も販売されているようですが、収蔵品は多くが手作りです。

なお、ウケを使う漁は、魚を陥れるものであることから、^{かんせい}陥穽具漁と呼ばれます。ある場所に魚をおびき寄せ、逃げられなくする漁を指します。陥穽具漁には、ヤナという漁法もあります。ヤナは、河に人工的に水が流れ落ちる場所を作り、そこにすのこ状のものを敷いて魚を受けて捕る漁法です。これは大規模に設置されることが多く、実際に使われたものは収蔵されていません。

②アミ

ウケと同様に多いのが、アミに分類されるものです。一言でアミと言っても、その機能用法は様々です。ここに分類されるものは、最も種類が多いといえます。アミに分類される道具を使った漁法をみてみましょう。

○投網



写真3 投網

まず挙げられるのが、魚に網をかぶせてとる方法です。投網(トアミ、あるいはナゲアミ)と呼ばれる道具を使っていました(写真3)。ウケと並び、かつては中心的に使われていました。鮭や鱒、鯉を捕ることが多く、中流で

行われますが、上流でも行われた漁です。長野市周辺で多くみられ、最も一般的な方法の内の一つでした。

○ケーサンド



写真4 ケーサンド

トアミと並んで一般的だった網漁は、すくい網を使うような、すくう漁です。すくい網には、いくつかのタイプがあります。他の方法で捕まえた魚をすくいあげる際などに小型の手網などが使われましたが、中には何メートルもある大型のもので魚をすくうことがありました。ケーサンド（写真4）はすくい網の一種です。U字型の枠に網を張ったもので、柄を持って川から魚をすくい上げます。また、柄がないものもあり、U字型の枠を直接手で持ち、網で魚をすくいました。

○四ツ手網



写真5 四ツ手網

四ツ手網漁は、中流域で行われ、長野市内で多く見られた漁法でした。組んだヒゴに張った網で、魚をすくいあげる漁法です。流れが淀んだ場所に沈め、魚が入るのを待ち、すくい上げます。主には鯉や鮒(フナ)を捕っていましたが、若穂川田などでは鮭も捕られていました。四ツ手網には、固定式と移動式がありました。固定式の四ツ手網は、櫓に組んで使われ、千曲川、犀川、浅川で見られましたが、増水した際には使えなくなってしまいました。そのような時や、岸の浅いところにいるフナや鯉をすくう時に移動式を使っていました。四ツ手網は大きい場合が多く、固定式は特に大きかったようです。大きいものだと、アミの一片が2間(3.6m)以上もあるので、なかなか実物が残りません。写真5は、四ツ手網の模型です。実物の収蔵品としては、骨組みはなく網だけが残っています。

○マエカキ



写真6 マエカキ

四ツ手網と同様に魚をすくう漁として、マエカキを使う漁があります。こちらは、雑魚(小さい雑多な魚)を対象としていました。岸边に潜んでいる小さい魚などを棒で追い出し、写真6のような網ですくい上げました。

○待ち網・追い込み網



写真7 待ち網 (模型)



写真8 追い込み網 (模型)

待ち網・追い込み網は、袋状の網を設置して魚を捕るものです。袋網に魚が入るのを待つ場合は待ち網漁、魚を追い込んで捕獲する場合は追い込み網漁です。形態はいくつかありますが、木などで作った枠に袋状の網を付け、口を上流に向けて水底に設置します。あるいは、上流に向かって開くように八の字に網を張り、中央に袋網をつけたものを水底に設置します。写真7は鳥居川下流で使われた待ち網の模型、写真8は鳥居川や千曲川で使われた追い込み網の模型です。

この他にも、アミバリ・サシアミといった道具があります。これらアミ類は、実際には多く使われていたものの、収蔵品としてはあまり多くありません。実物が残りにくい傾向にあるといえます。

③ヤス



写真9 ヤス

刺突漁は、上流と中流で行われます。上流ではイワナ・ヤマメ等を捕り、中流では鮭や鱒を捕りました。魚を突く漁で、ヤス(写真9)を使います。ヤスの先は4~5本に分かれ、アゴ(反し)がついています。これで魚を突き、仕留めます。その際には、箱メガネ(写真10)で川の中を覗き込んで魚を見つけることもありました。当館には、ヤスが4本収蔵されています。



写真10 箱メガネ

④ツリ

ツリにもいくつか種類がありますが、博物館にはあまり収蔵されていません。

ツリは、趣味で行っていた人も多い方法です。博物館には、松代藩士の家だった師田家より釣り道具一式が寄贈されています。師田家には県外の漁業鑑札もあることから、師田家から寄贈されたツリの道具は、そのような趣味の一環で使われていたものだったと思われる。

⑤その他

この4種の他、手づかみで魚を捕ることも多くありました。豊野町ではテドラメ（手どらめ）漁と呼ばれ、鳥居川でよく行われていました。大きな河だけではなく、水田や用水でも魚が捕られていましたが、そのような場では、手づかみで魚を捕ることが多く、より身近な魚を捕る場でした。

また、漁撈には補助具として様々なものが使われていました。河で魚を捕るためには、漁業組合から許可を得る必要があり、漁業権の証明として鑑札が必要でした。当館では、漁具だけでなく、これらの補助具や関連資料も所蔵しています。

採集地

漁具の寄贈元の地域を見てみましょう。採集地は、概ねその漁具を使用していた地域と考えられます。当館の収蔵資料の採集地は、図1のとおりです。

長野市と周辺地域、特に犀川と千曲川が合流する付近で多く収集されています。千曲川沿いに坂城町網掛（M）、千曲市土口（F）、篠ノ井（D・K）、松代（J・L・N）、真島（A・P）、穂保（R）、豊野（S）、犀川沿いに安茂里（B・O）、青木島（E）、川合新田（G）、大豆島（H）などがあります。

これらの地域は、川と密接にかかわってきた地域です。川での漁撈が行われていた地域は、度々水害にあってきた地域でもありました。令和元年の東日本台風では、長沼、豊野、篠ノ井、松代、若穂で浸水被害がありましたが、これらの地域は、千曲川での漁撈が行われてきた地域でもあるのです。

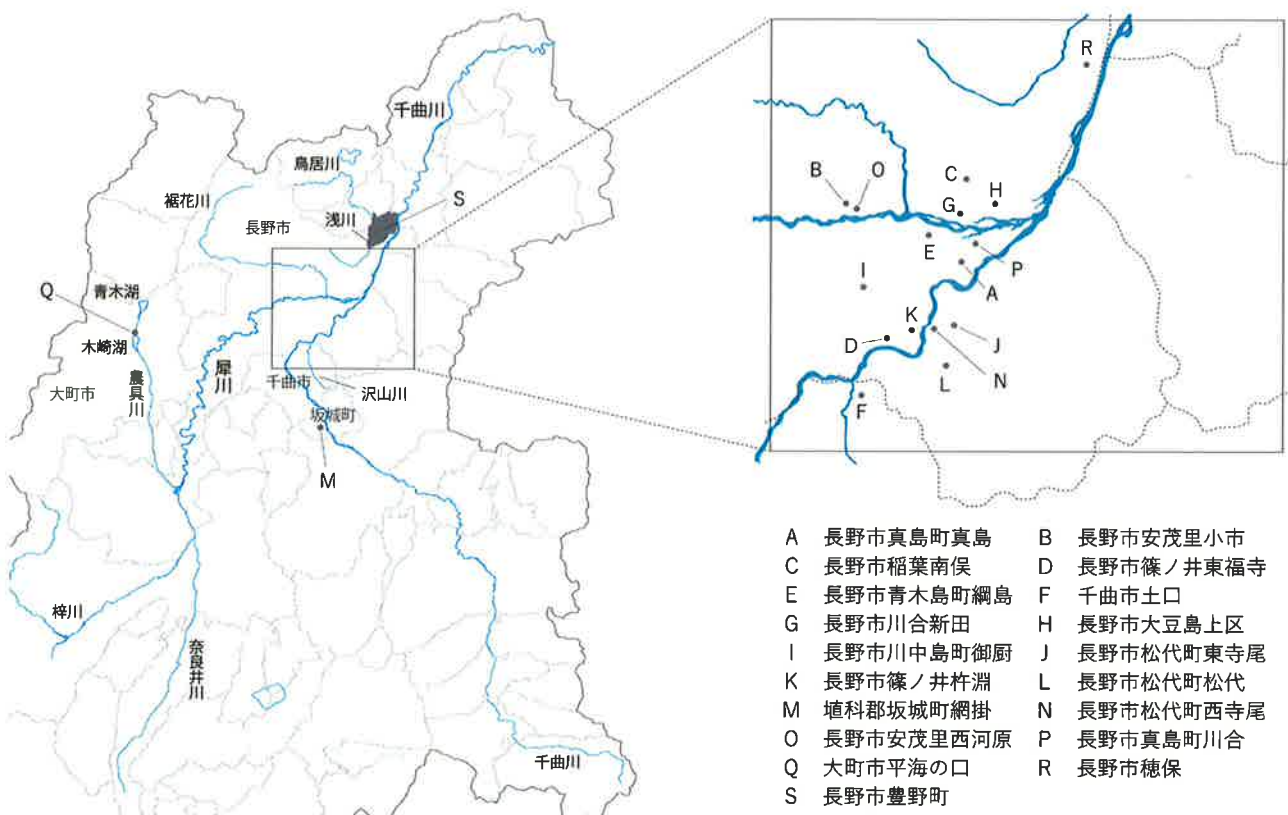


図1 収蔵資料の採集地

採集地にかかわる古文書



写真 11 大豆島区有文書
(長野市指定有形文化財)



写真 12 北村家文書 623

漁具の採集地には、魚にかかわる文書も残っています。文書を見ると、近世には、鮭や鯉がとられていたことがわかります。

大豆島村、新田川合村、川合村では、藩主の食卓用に鯉を献上することとなっていました。博物館に収蔵されている文書には、これらの地名と取られていた魚が出てきます。

例えば、鮭漁にかかわる大豆島区有文書(写真 11)や、新田村の鯉盗みにかかわる文書(写真 12) があります。大豆島区有文書は、江戸時代初期のものであり、長野市有形文化財に指定されています。大豆島村に対して松代藩が鮭漁を許可し、税を納めるよう申しつけています。「鮭之打切」という字が見えますが、「打切」とは魚の取り方を指します。

○柳島家文書



写真 13 柳島家文書 (1996D0004) 9-1

写真 13 は加賀藩主に鮭を贈ったことに対する礼状です。これは、丹波島宿本陣の柳島家文書の内の一つです。柳島家文書には、魚に関する文書がいくつかあり、鯉を献上したことにかかわる文書がみられます。

写真 14 (柳島家文書 201)、写真 15 (柳島家文書 725)、写真 16 (柳島家文書 942) は、小幡又八郎から柳嶋瀬左衛門に送られた書状です。小幡又八郎は、松代藩で大目

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho) on a folded paper strip. The text is arranged in vertical columns from right to left. The characters are fluid and connected, typical of the Edo or Meiji periods. The paper shows signs of age and wear.

写真 14 柳島家文書 201

Handwritten Japanese text in cursive style on a folded paper strip. The text is dense and fills most of the strip. The writing is consistent with the other examples, showing a high level of skill in cursive calligraphy.

写真 15 柳島家文書 725

Handwritten Japanese text in cursive style on a folded paper strip. This strip appears to be a different document or a different section of a larger document. The text is clearly legible despite the cursive style.

写真 16 柳島家文書 942

(これらの古文書の整理・調査にあたっては、長野市立博物館友の会の古文書同好会有志の方々のご協力をいただきました。)

付を務めた人物です。明和5年(1768)9月21日に権之助から改名して又八郎となり、天明4年(1784)8月13日に死去しました。そのため、この3点の文書は、1768年～1784年に出されたものと推察されます。

201は、八月晦日付で、鯉を2本調達するように依頼しています。「あらめ」と書かれていますが、「あらめ」とはアラメ(荒目)鯉のことと思われます。アラメ鯉は二ゴイのことで、養殖された鯉ではなく、長野県の河川に生息している鯉を指します。天然の鯉を河で捕ってくるように指示されていたとわかります。

725は9月13日、942は9月14日付です。

9月13日付のものからは、殿様の主膳が16日に入るため、あらめ鯉を2本揃えて納めることになっていたことがわかります。ただ、あらめ鯉が不揃いだったため、鮭を生かして納めることとなるようです。

9月14日付からは、鯉と鮭の差し入れが少なかったために生きた鮭を納めるよう申し受けていたことがわかります。昨日は片便だけだったため、明日はあらめ鯉も鮭も確かに仕入れた分を納めるように伝えています。

他にもいくつかの文書に、鮭や鯉の存在がみとれます。これらの文書からは、丹波島と鯉や鮭のかかわりや、献上品としての魚についてみるすることができます。また、これまで、犀川や千曲川では鮭の存在が注目されていましたが、鯉の存在も注目すべきものだとい

ことが示唆されています。今後、こういった史料をより詳細にみることで分かることも多いでしょう。

おわりに

今回は、博物館の収蔵品から、漁具や魚に関係するものをみてきました。現在、漁撈の様子をみる機会はほとんどなくなりました。しかし、長野県内には、現在もツケバ小屋をみることができます。ツケバとは、魚が産卵しやすい場所を作り、魚を捕獲する漁の場です。現在は、ツケバ漁などで捕られた魚を、ツケバ小屋で観光客向けに提供しています。ツケバ小屋は4月～6月に営業しており、その近辺では今回紹介した資料と同一ような道具が使われています。千曲川の漁撈の様子が見られるかもしれません。

(樋口明里)

参考文献

- 豊野町誌刊行委員会編 1998 『豊野町の民俗と地区誌 豊野町誌3』
- 長野市立博物館 1986 『漁とくらし』
- 長野市立博物館 1991 『千曲川』
- 原田和彦 2021 「江戸時代における『殿様御用鯉』について」 長野市立博物館 『長野市立博物館収蔵資料目録7 漁撈関係資料』

博物館だより 第117号

発行日2021年3月31日

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414

TEL:026(284)9011

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400

TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659

TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3

TEL:026(262)3500

ミュージ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1

TEL:026(262)2500